昭和51年5月1日発行　（通巻第54号）

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年5月号

日本ヒマラヤ山岳協会——HAAJ

HIMALAYAN ALPINE ASSOCIATION OF JAPAN

＝東部ヒマラヤ研究会へのお誘い＝

「アッサム北部の山岳地帯をめぐって」

藤井　毅

ヒマラヤ山脈を，ブータンよりもさらに東にたどっていくと，7000メートル級の高山が点在する“アッサム・ヒマラヤ”と呼ばれる地域にいきあたります。そして，さらに東に視点を移すと，ヤルツァンポ江の渓谷をはさんで，幾分高度は低くなるものの6000メートル級の山々のそびえる南東チベットへと達します。一方，その南東チベットやインド東北辺境と境を接するビルマ北部や中国雲南省北部にも，カ・カルポ・ラジをはじめとする。6000メートル級の注目すべき山々を見ることができます。

アッサムの北辺を中心とするヒマラヤの東部地域は，現在にいたるまで，私たちの手の全くとどかない閉ざされた地域でした。

そこにはどんな人達が住んでいて，どんな文化を持って，どういう暮しをしているのか。あるいは，“アッサム・ヒマラヤ”というが，何という名の，どういう山が，どこにあるのか。そういうこまかいことは，すべて私達の実際に知ることのできないことだったわけです。

“アッサム”といっても，その言葉から思いうかぶのは，「アッサム紅茶」か「年間降雨量が10,000ミリを越す土地がある」といった程度のことで，アッサムの平野部や，山岳地帯の全体像を描き出すことは，大部分の人にとって困難なことだと思います。

毎年おびただしい数の人達が訪れているネパールなどにくらべると，アッサム一帯は，私たち外部のものにとって，一昔も二昔も前の，登山や旅行の対称となる以前の土地といってもよいでしょう。

現在も，アッサム北部の中印国境は画定されておらず，昨年も，中国とインドの武力衝突が伝えられたばかりです。アッサム北部は新しい州の名の，“アルナチャル・プラデッシュ”と呼ばれ(以前のＮＥＦＡ)，インドの行政下におかれています。

現在，一応の境界線といわれている。マクマホン・ラインは，だいたい自然境界に一致し，その境界上にはニュギー・カンサン（7047m），ゴリ・チェン（6751m），カント（7089m）等の高山を目にすることができます。また，目を東に転じれば，ヤルツァンポ江の大湾曲部にそびえたつ，ナムチャ・バルワ（7755m），ギャラ・ペリ（7150m）などの存在に注目できます。

“登山”という行為そのものについてみれば，アッサム・ヒマラヤはゴリ・チェン以外に見るべき記録はなく，今日に至るまで，地理的踏査の対象だったといってよいでしょう。

つい最近では，1973年以来進められてきた，中国科学院の手による，ヤルツァンポ江の大湾曲部に対する総合科学調査の結果が発表されはじめたことが注目されます。

Ｆ，Ｍ，ベイリイの“No Passport to Tibet”(邦題「ヒマラヤの謎の河」)などを通してしか，知ることができず，長い間“神秘の渓谷”“ナゾの湾曲部”といわれてきたこの渓谷が，今，私たちの目の前に開かれると思うと，軽い興奮をおぼえるものです。

また，このように外部の者である私達にとって地理的に理解できない点が多いこのアッサム一帯は，同時にすばらしい人達が住む土地でもあるのです。

ハイメンドルフ教授の「ヒマラヤの蛮族」などによってわずかながら知ることができますが，アッサムの北部は主要な部族だけでも25を越す様々な部族の人達が暮す土地であるわけです。

ブータンやチベットと境を接する地域では，ラマ教文化のもとに暮らすモンパ族，ビルマと境を接する地域ではビルマからラオス，ベトナムへと，東南アジア諸地域とのつながりの強い部族が住んでいます。

平野部のインドや，ヒンズー教を信仰するインド，あるいは，チベットなどは，多くの点で違う，様々な部族が独自の文化をもって生活しているわけです。

現在このアッサム北部の行政を担当している，“アルナチャル・プラデッシュ”の文化政策とい

うものはどういうものなのかということは，アルナチャル当局から発行された書籍を通してからしか知ることができませんが，それから知りえた範囲では，このアッサム北部の山地に住む人々というのは，インド亜大陸のなかでも，きわめて特異な，雄大な世界を持った人達であるように思われるのです。

私が，この東部ヒマラヤ地域にひかれ出したのは，74年にアッサムを訪れて以来なのですが，私自身その全体像すら描き出すことができないのに，こうしてつたない文章で，会員の皆さんに，アッサム周辺を紹介することはほんとうに不可能なことだと思います。

しかし，それでも敢えて，こうして「東部ヒマラヤ研究会」への参加を呼びかけたいと思います。

ヒマラヤ全域のなかでも，きわめて特異な地域であるこの地に暮す人たちとのかかわりを作っていく実践的な研究活動を進めていきたいと思います。

私個人の考えでは，アッサム・ビルマ北部南東チベット，雲南北部等を主要対象地域とし，とりあえず，文献目録作り，主要文献の翻訳を中心に行い，アッサムやビルマでも入域可能な地域を訪れてみることを考えています。また，私個人は，その地に住む人々の生活や文化に大きな興味があるのですが，アッサム・ヒマラヤの未踏峰への実際的な登山活動，地理的探査活動を推し進めていきたいと思っている方々の参加も是非お願いしたいと思いはす。集中的に活動したいのでＨＡＡＪの他の研究会に所属されている方はご遠慮下さい。

とりあえず，メンバーの出そろうまでは，藤井が事務を担当いたしますので，下記まで連絡をいただきたいと思います。

〒153東京都目黒区

藤　井　　毅

藤井は８月中旬よりアッサムへ調査に行き，12月末のHAAJアッサム調査隊の現地準備をしますので連絡は７月末迄にして下さい。

ラダックの開発

インドの月刊新聞「HIMAVANTA」1975年３月号より

ラダックの繁栄にむかってのおそい歩みは人々にとっては不満足なものである。その理由を見つけるのはそうむつかしいものではない。

ラダックの労働できる期間は１年のうち僅か６カ月しかない。しかも，1974年には175人の役人はほんの数日間から５カ月しか滞在しなかった。彼らのほとんどはカシミールからきており，ほんの僅かがジャンムからきているだけだからである。このことは，開発局長（Development Commissioner）の事前の許可なしで毛布を作ることを禁止したりというように開発に影響を及ぼしている。

例えば，プガ（Puga）の地熱発電は1973年に調査されたが，仕事は最近始まったばかりである。現在，丁度１〔ＭＷ〕の電気を送り出している。世界で一番標高の高いところにあるスタックナ（S-takna）の発電所も調査され仕事が始まっている。

早く手をつけねばならないすべてのことが充分考慮されてはいないのである。この地方の建築のパターンに調和しない堂々とした建物の建設がインド中央政府の調査団によってコメントされている。しかしながら，ラダックの進展に対しての主な防害は不充分な電力と通信である。今やそれらは最優先ですすめられるべきである。

きびしいラダックに“緑の革命”をもたらす前ぶれとして軍の食料研究所によって救急の処置として温室効果をする銀色の肉ばりがなされただけである。一世紀の間，“クリム”と呼ばれる大麦の一種の他は育たなかったものである。

農業研究所はポリシートをぶせた溝に種をまき，気温が０度近くでも発芽の早くなるという野菜を育てる方法をおこなっている。種は３月初旬にまき，４月中旬には苗をピーナツの間に植えることができた。軍の科学者は軍の仕事だけにとどまらなかった。彼らは個人農家を訪ね，農夫を研究所に招待し，農夫たちと一緒に話しあった。

彼らの熱意が実って，農家の生産は1973年初頭には早くも1200トンの野菜1500万ルピーとなった。それ以来，生産はだんだん増加し，今ではキャベツ，カリフラワー，人参，カブラ，豆，トマト，

玉ネギ，トウガラシなどができるようになった。最近ではトウモロコシや小麦も育てている。農夫はかっては泉か小川から水をひいていたが，今はパイプの井戸を使っている。軍の科学者は現在農業シーズンの延長，多重種まき，きのこの育成，園芸の楽しみ，そして植林さえも目的として3333mから6000mの高所で温室と温箱の実験をしつつある。その成功を祈りたいものである。　（沖　訳）

ＮＫ，ＧＨ隊報告会開く

両隊の健斗をねぎらう

HAAJが75年に派遣したカシミール・ヒマラヤ及びガルワール・ヒマラヤ両遠征隊の正式報告会が，２月27日約70名の出席者を得て開催された。

会場の東京郵便貯金会館はイスが足りないほどの盛況で，HAAJ会員以外も多数参集された。

報告会は午後６時30分に開会，植竹理事の司会で進められた。岩水理事の挨拶のあと最初にカシミール隊の報告が行なわれた。

山森副隊長が遠征概要を説明したあと，スライドを使用してスリナガル出発から始まって登山行動の内容を詳細に紹介した。

頂上直下7000m近くまで迫りながら一歩及ばず断念せざるを得なかったが，少人数，短期間で全力を尽した同隊の健斗に盛んな拍手が送られた。また，この山域での登山は我国最初であり，貴重な記録として参加者の興味を引いたようである。

次いでガルワール隊の報告が清水隊長から行われた。

登山のあらましを報告のあと，８ミリ映画が上映され，稲田副隊長との対談形式で説明があった。インドの街の風景，キャラバン中に見かけた青いケシの花，そして三峰の初登頂に至るまでの経過に参加者を引きつける内容であった。(只，残念なことにフィナーレの部分が映写機のトラブルでカトされた。)

40年ぶりに人間が入ったというめずらしい地域だけに貴重な記録であった。

終ってインド・ヒマラヤに関しての質疑が行われ，午後８時30分に閉会した。

参加者の範囲は青森から長崎までとHAAJらしい報告会となり，久しぶりに親交をあたためる風景が沢山見られた。

参加者には両隊の帰国報告書「インド・ヒマラヤ」が配布された。これは「ヒマラヤ」３月号を一部改訂したものである。いずれ本報告書が発刊される予定になっている（帰国報告書は１部600円＋送料で事務局に若干残部がある)。

また両隊の英文梗概も希望者に配布された。閉会後HAAJヒマラヤ委員会が行われ，アフガン隊のことなどを検討した。

═══ インド・ヒマラヤ報告会・会計報告 ═══

収入	会費	参加者71名中，招待者17名は無料 71－17＝54名×1000円	54,000円
	寄付	青森県八戸ヒマラヤ遠征隊 （1976年ドウナギリ）	10,000円
			計64,000円
支出	会場費		6,710円
	連絡費など雑費		3,190円
	報告書印刷費の１部として		54,100円
			計 64,000円

上記の通り報告いたします。　　係　　沖

～～ HAAJ ヒマラヤ集会 ～～～ 予告

〈東京ヒマラヤ集会〉　毎月第１金曜　自由集会　18時30～
第４金曜　テーマ集会　18時30～
於：HAAJ東京事務所。以下同じ。

４月23日（金）ガルワル・ヒマラヤ情報
５月21日（金）秘境ラダック
６月25日（金）アフガニスタンの旅

〈名古屋ヒマラヤ集会〉　毎月第２金曜日
於：名古屋駅前エア・インディア
ホテル・ニューナゴヤ 747号室
㊙ 052-581-5876

４月９日（金）ガルワル・ヒマラヤ情報
５月14日（金）未知のザスカギル
６月11日（金）秘境ラダック

〈５月の連休山行〉　ワハン隊の合宿に合流して山行をおこなう予定です。参加希望者は名古屋事務所へ大至急申し込んで下さい。雪の山を歩いたことのある人ならどなたでもどうぞ。

サンダクプー紀行

1975. 10. 28～29

一行は6人，というのもなけなしのルピーをはたいて 500ルピーのジープをチャーターした私達二人と，そのジープの運転手と助手，それにいつの間にか私達の仲間に当然のような顔をして加わってきたヒマラヤントラベルのボスと彼の友人。シートがあいているのはもったいないというインド式の合理主義か，それとも私達が行こうとしているサンダクプーとはそんなにいい所なのだろうか？というヤジウマ主義か……。

そもそもサンダクプーに行こうとした理由は，ダージリンまで来た事と同じにとにかくカンチェンジュンガをできるだけ近くから見たいという事に尽る。HMI に行きテンジン氏やゴンブ氏に会う事も，またシッキムに入る事も当初の目的ではあったが，そのどちらも私達のインドでの行ないの悪さがわざわいしてか果せず，また一般の観光客と一緒にタイガーヒルに行く事だけでは何ともあきらめきれず，いつものレストランで集めてきたパンフレットを見て急に行こうという気になったわけだ。許可も外人登録事務所で簡単にとれた。ここでも私のチベット人的な顔付きが役に立ったようだ。

ともかく2日分の酒と食糧を買いこみ，不要の荷はホテルにあずけサンダクプーに向けて出発だ。

ダージリンの街をぬけてバグドグラ方面に戻り，グームという街から右に入る。左に行くとテイッサ河を渡りカリンポン，ガントクに通ずる。しばらくは舗装された道が続き，スキアポカリという街で運ちゃん車をとめ，サンダクプーは寒いからとビールを買ってきて，「お前たちもどうだ」としきりに勧めてくれたが，心配御無用。次の街のチェックポストで型通りのチェックを受けて先に進む。車の通る道は常にいい道と思っていた私達が甘かった。このメグマという街のすぐ裏の急斜面にいきなり取り付き，それからが悪夢の始まり。何と表現したらいいか，とにかく振り落されないように二人とも必死。胃袋も腸もごっちゃになってしまうのではと真剣に考えた。おまけに天気がはっきりせず，せっかく 500ルピーも払って山を見に行くのにと思うと気分的にいい材料などあるはずはない。この道のありさまを前に知っていたならたとえ 500ルピーもらっても行く気にはならなかったろう。時折霧の中から私達をバカにでもするかのようにのっそりと牛や山羊が顔を出しては消えて行く。車輪の右はインド・左はネパールというようなきわどい尾根を突走る。ダージリンを出たのが昼近かったのでいつのまにか日も暮れた。一番うしろにいた助手が「サンダクプー！ラストクライム」と叫び，ジープは今までにも増して急な道をそれこそ最後のあがきでもあるかのように人も車も一緒になって次々と現れるカーブを切り替しながら登って行く。

そしてやっと着いたのです。サンダクプーへ，それこそやっと。

バンガローに落ち着き，いせい良く燃えるだんろの火を見つめ遠征で残った食糧の中から大切にここまで持ってきたするめをさかなにウイスキーのビンをあける。

3650m，サンダクプー，明朝はいよいよカンチとの対面と思うと何とも満ち足りたごうかな気分だ。貸りものの三重シュラフにもぐりこむ。

3時に起すと云っていた運ちゃん達を起こしたのが5時半，窓を明けると寒気がツンと鼻にくる。晴れてるゾ！急いであるだけのものを着こみ，カメラの袋を持って外に出る。とたんに目の前いっぱいのカンチ山群，声も出ない。できるだけ高いながめのいい所をと2人であっちへうろうろ，こっちへうろうろ。バンガロー裏手の小高いピークに立つと，正面にカンチェンジュンが左に小さく

サンダクプーよりのカンチ(右)，ジャヌー(左)

ジャヌー，そのずっとずっと左マカルー，ローツェの間にエベレスト，刻々と秒単位で8000mの巨峰群がその装いを変えていく。ファインダーをのぞく事もしばし忘れる素人カメラマンの悲しさ。登山家としては最高の喜びの時。

カンチの何と大きく，エベレストの何と小さい事よ，私達が今立っている尾根はカンチまで続いているのだろうか？このままあの高みへと向けて歩いて行きたいものだ。

HAAJガルワル隊々員　　舘野秀夫

秋のヒマラヤ集会予告

10月9日（土),10（日),11（祭）の2泊3日。八ケ岳山麓中央高原。樅の木荘および阿弥陀岳登山などハイキングも含めておこないます。詳しくは追って知らせますが，宿泊人員40名で〆切りますので早目にハガキで名古屋事務所へお申し込み下さい。会費大人 9,500円，小人 6,500円。

ミニ・ニュース

新ネパール大使決る

新ネパール大使は佐々木正賢（ささき・せいけん）氏に決った。京大法卒，昭和20年外務省にはいり，領事移住部領事課長を経て，47年1月よりオーストリア公使。53歳。(朝日新聞のニュースより）なお，バングラディシュの大使も吉岡一郎氏が新任された。

〈ヒマラヤ学入門〉 その38

植物検疫について

ヒマラヤのシャクナゲやエーデルワイスを日本へ持ちこめますか。花の種はどうでしょうか。という質問をよくうけます。モグリで持ち込むことはいけません。農林省植物防疫所では下記のようにPRしています。

◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇

◉外国から持ち込む植物はすべて植物検疫が必要です。

ランの苗，植木などだけでなく，パインアップル，オレンジなどの果物，チューリップなどの球根，野菜・草花などの種子，わら製品など，植物はすべて輸入時に植物防疫官の検査を受けなければなりません。

検査は税関検査の前に受けるようにして下さい。

また，外国から植物を持ち帰る場合は，その国の植物検疫機関をたずねて検査を受け，植物検疫証明書をつけてお持ち帰り下さい。各国とも主要な海港や国際空港には植物検疫機関があります。

なお，リンゴ，ミカン，ナシなどの果樹苗木，チューリップ，ヒヤシンス，ダリヤなどの球根類，サトウキビ，ジャガイモなどは，輸入時の検査のほかに，一定期間隔離ほ場で栽培し，ウイルス病などについて精密な検査を行なったうえで，お渡しすることになります。

◉持ち込みの禁止されている植物があります。病害虫や土も禁止品です。

病害虫の種類によっては，輸入時に検査しても，表面からでは発見できないものがあります。このような病害虫のついているおそれのある植物は，輸入が禁止されています。

土や植物に害を与える病害虫（蝶なども含む）はすべて輸入が禁止されています。

外国から持込まれた病害虫は天敵がいないことなどからしばしば猛烈な繁殖をし，農作物や樹木に多大の損害を与えています。有効な防除手段もないものがあります。あなたが不用意に持ち込んだものがどのような結果をもたらすか，事の重大性を良く認識したいものです。

外国へ持出す場合も制限があります。詳しくは近くの植物防疫所でお聞き下さい。防疫所は農林省やその出先機関，主な空港や海港にあります。

地　　域	輸入が禁止されている主な植物	輸入できる主な植物
ヨーロッパ，中近東，アフリカ，オーストラリア，ブラジルなど	すべての生果実（ただし，右の欄にあるものを除く），クルミ，イネワラ，モミなど	パインアップル，ココヤシ，未成熟バナナの生果実，苗木類（ブラジルを除く），球根類，種子，切花など
アメリカ（ハワイを除く），カナダ ニュージーランド	リンゴ・ナシ・モモ・スモモ・サクランボなどの生果実，クルミ，ムギワラ，イネワラ，モミなど	オレンジ・レモン・グレープフルーツ・メロンなどの生果実（ハワイを経由するものを除く），ランの苗，種子，切花など
ハ　ワ　イ	すべての生果実（ただし，右の欄にあるものを除く），イネワラ，モミなど	パインアップル・ココヤシ・未成熟バナナ・日本向け植物検疫証明のあるパパイヤの生果実，ランの苗，アンスリュームなどの切花
中　　国	リンゴ・ナシ・サクランボなどの生果実，クルミ	パインアップル・ココヤシ・ドリアン・ランサットなどの生果実，未成熟バナナの生果実，ランの苗，種子，切花など
中国，台湾，ホンコン 東南アジア（フイリピン・インドネシア・タイ・インド・パキスタンなど） グァム，サイパンなど	ポンカン・タンカン・ザボン・ライムなどのかんきつ類，スモモ・パパイヤ・リュウガン・レイシ・ゴレンシ・バンジロウ・アボカド・ランブータン・マンゴー・スターアップル・サポジラ・レンブ・バンレイシ・マンゴスチン・ナス・トマト・トウガラシ・スイカ・キュウリ・ニガウリ・カボチャ・成熟バナナなどの生果実，イネワラ・モミ（台湾を除く）	

以上のほか，アメリカ（ハワイを含む），ブラジル，台湾，フイリピン，インドネシアなどからの根付きの植物は，ほとんど輸入が禁止されています。

〈ヒマラヤ学入門〉その39

パスポートの取得方法

鈴　木　康　志

外国へ行くのにはパスポート（旅券）が必要なことは誰れでも知っているが，その取得方法は案外知られていないようである。たいていは旅行業社にまかせてしまうので詳しいことは知らないでもすませることはできるが，できれば手続のことを知っておく方がスムーズにパスポートを取得するためには望ましいといえよう。

まず，旅券の発給申請書が正副２通必要です。そして抄本，住民票を各１通，写真を２枚用意して下さい。認印も必要です。あとは下記のようなことで申請し，８日～15日後に旅券を取得できます。忙しい人は旅行業社に上記の書類を渡して依頼する方が安上りで確実です。旅行業社は普通「海外旅行のためのお伺い」書を申請者から提出してもらってそれによって上記の旅券発給申請書などを作成してくれるのです。

〈観光，一時訪問，その他の個人目的のための旅券申請方法等について〉

1　申請書提出先

旅券の発給申請をされる方は，次の書類等を持参のうえ，本人が直接，都道府県の観光課旅券係へ提出します。なお，申請できる方はその都道府県内に住所（居所）がある方に限る。

2　申請に必要な書類等

(1)　一般旅券発給申請書…２通（県庁などにあります）

(2)　戸籍抄本または謄本…１通

- 申請日前６カ月以内に発行されたもの

(3)　写真（５cm×５cm）…２葉

- 申請日前６カ月以内に撮影したもの
- 無帽，無背景なもの
- 上半身（胸部まで）正面向（両耳の位置が見えること）のもの
- 併記者がある場合は，その子とともに撮影されていること，ただし，６才未満の子については省略することができる

※旅券用写真として不適当なもの

- スピード写真およびポロライド写真
- 女子のヘアーバンド，リボン等着用のもの
- 黒メガネをかけているもの（盲人を除く）
- 下着姿のもの

(4)　渡航費用の支払能力を立証する書類…１通（次の書類のうちから，いずれか一つを提出）

１）旅行業社から，交付をうけた「旅行引

受書」

2）航空機または船舶の往復切符（提示）

3）渡航に要する費用に相当する額以上の申請者名義の預金残高証明書または預金通帳（提示）

4）前年度分の所得税納税証明書または源泉徴収票

5）申請者の職業を証明する書類（自営業者に限る）

〔例．営業許可証，業種別組合の組合員証等またはそのコピー〕

6）国外に居住する者（法人を含む）が作成した保証書

7）申請者を扶養している者，申請者の3親等内の親族または配偶者で独立の生計を営む者が作成した渡航費用を負担する旨の保証書〔様式あり〕

(5) 印鑑

• 通常使用している認印

(6) 申請者の身元を証明する書類

（次の書類のうち，いずれか一つを提示）

1）運転免許証，船員手帳，銃砲所持許可証等官公庁の発行した身分を証明する書類

2）健康保険，国民健康保険等の被保険者証，国民年金手帳等

(7) 渡航先，渡航目的によって特に必要とされる書類

例えば，国家公務員の場合は所属省庁の長の渡航承認書…1通

北朝鮮へ渡航する場合は渡航趣意書…5通

(8) 申請者が未成年の場合

法定代理人の同意が必要

• 法定代理人の署名欄には，親権者が自署，捺印または同意書〔様式あり〕が必要

(9) 申請に本人が出頭できない場合

やむを得ない理由により旅券発給申請に本人出頭が困難であると知事が認めるときは，出頭免除の手続きにより申請者の指定した者を通じて申請することができる。この場合は「出頭免除願書」〔様式あり〕の提出となる。

(10) 住民票の写し及び官製葉書…それぞれ1通

3 旅券の交付予定日

旅券発給申請日から8日目（休日を除く）になります。なお，旅券受領後に査証（ビザ）の申請，外貨交換等の手続きが必要ですから，旅券申請には，充分余裕をもって申請すること。

4 旅券の受領

旅券の受領には，次の書類等を持参して必ず本人が出すこと。

(1) 一般旅券受領証（申請書受理の時にもらった用紙）

(2) 印鑑（申請書に捺印したもの）

(3) 収入印紙（受領証に貼付）

• 一往復用旅券……3,000円

• 数次往復用旅券（5年間有効）…… 6,000円

5 予防注射

通常「種痘（天然痘）」のみですが地域などによっては，コレラ，チフス，黄熱病が必要になりますから医師の指示に従うこと。

接種は厚生省検疫所または接種病院で行う。

• 有効期間　種　痘……3 年 間

コレラ……6カ月間

6 査証〈ビザ〉

日本にある渡航先国の大使館または領事館に旅券，必要書類などを提出申請してください。

ドゥナギリへ遠征（青森岳連隊）

このたび私たち青森県山岳連盟では，ガルワール・ヒマラヤ，ドゥナギリ（7066m）へ遠征隊を送ることになりました。準備にあたりましては，HAAJガルワール隊から大量の装備を譲渡していただき，また，昨年の偵察についてお世話になるなど，あらゆる面で御支援をいただきました。

また，3月には八幡平でHAAJ東北の有志による激励会を開いていただくなど，物心両面の御援助に感謝のほかありません。東北から7000mをめざす最初の隊でもありぜひ共良い成果をおさめて来たいと存じます。（隊長　加賀勝　HAAJ会員）

なお同隊は4月下旬に出発し，5月中旬から1カ月間の登山行動を行ない7月下旬に帰国する予定である。

隊員は皆HAAJ会員であり，HAAJガルワール隊とは密接な連絡のもとに準備を行なってきただけに成功を祈りたい。

留守本部　八戸市白銀町字雷48　　松倉幸一方

ラダック小史〈2〉

征服と崩壊，そして平和

大　木　滝次郎

ラダックへ入った外国人

このようにスパイ活動のためかなりの外国人がカシミールからラダックへ入ったが，それ以外にも外国人がこのヒマラヤの秘境を訪れている。

1856年にアドルフとロベルトのシュラギートワイト兄弟はカラコルム調査のあとクルからロータン峠を越え，カンドンに達し，そして，バララチャ・ラ，ラルチャン・ラ，タクラン・ラ，など5000mをこえる峠を通ってレーに出た。現在このルートは車道が出来てマナリからロータン峠を経てレーまで 480kmほどを2日で走破できる。

ヘルマンは東に寄ったルートでタリ峠，パラン峠を経てチョモ・ラリ湖を訪ね。レーに出た。このあとカラコルムパスを越えた。

1890年から1892年，ニコラス・イトヴィチ(Nikohlas Notouitch）というロシア人は何度もレーに来ている。その間足を悪くしたことがありヘミスゴンパ近くで4カ月を住んでいたこともある。

1862～63年，ゴードンウィン・オースチン大慰はチャンチェン渓谷とパンゴン湖周辺をインド政府として正式に調査した。

1866年，当時，ラダックの知事であったジョンソン（Johnson）は1853年のカラコルム，カシュガルの探険についで1866年ラダックからカラコルム峠をこえてカラ・クシュ川上流部を調査し，はじめてコータンの緯度経度を測定した。

1867年ショウ（Shaw）はラダックからカラコルム峠をこえてヤルカンド，カシュガルへ旅をした。

1868～69年　ヘイワード（Hayward），ショウ，ケイレイはこのあたりの地図を作った。

1869～72年　ジョーソンの次のラダック知事であったドリューはレーに滞在していたが，そのころのカラコルム峠から東南へのチベットとラダックの境ははっきりしていなかったようである。

1873～74年　Forsyth, Goldon, Trotten, Hendeson　はラダックからカラコルム峠を経てパミールに入り，天山南方をはじめ中央アジアを広く歩いた。

1870～73年　ダグラス・フォーサイス卿による第1次，第2次ヤルカンド使節団がでている。この頃になるとラダック地区の地形はだんだん明らかになってきた。

1880～81年　Ujifarvy　夫妻が，ラダックからコルム峠，フェルガーナを通ってアラル海周辺までを調査した。

1888年，ローマン教会のKilityが8月23日にレーにやって来た。1889年にはDonson　もやって来た。キリスト教はあまり発展しなかったが，しかし，現在でもレーには教会があり，キリスト教信者も何人かいる。多くはマナリ地区からこれら宣教師に従ってラダックにやってきたようである。

1896年　ウェルギー，Malcolmはラダックとチベットの西部を調査した。

1899～1902年，S.ヘディンはロプ・ノールから楼蘭に到り，楼蘭遺跡を発見し，チベットに入りラサに行こうとしたが失敗し，レーにもどってインドへ出た。

1903年　Crosby, Anginieum　はオシュからカシュガル，コータンを経てチベットへ入り引きかえし，カラコルム峠をこえてレーに入った。

1906～1908年　ヘディンは再びレーにやってきて，レーからチベット高原に入った。このときトランス・ヒマラヤ，チャンタン高原などをさぐった。

1902年　（明治35年）日本の大谷探険隊がカシミールに入った。大谷光瑞，本多恵隆，井上弘円であった。第2次の橘瑞超，野村栄三郎も蒙古より西に来てカシュガルに達し，10月2日カシミールに入っている。

1906年には10月13日北京から王門関をこえカシ

ュガルに入りヤリカンドに達した。ここからカラコルム峠を越し，レーに到りさらにゾジ・ラを越えてスリナガールへ入った。おそらく日本人として初めてレーを訪れた人だと思われる。彼は「伊犂紀行」という本を書いている。最近芙蓉書房より複刻された。

1937年には支那事変がおこり，日本人の関心はアジアから中央アジアへとむき，スリナガールにも石崎光瑤，平等通昭らが足跡を残している。

1913～14年　De　Fillipi の探検隊はラダックからカラコルムを経てカシュガルに至った。

1927～28年　トリンクラ（Trinkles），ド・テラ（De　Terra）はラダックからカラコルムを経て，カシュガル，コータン，タクラマカン各地に行っている。

この時期から以後もラダック地区に旅行者や調査隊が入るようになったが，アクサイチン地区に入るようになったのは，1870年頃からである。

1947年にインドが分離独立したときからカシミールは二つに分けられ，東はインドへ，西はパキスタンへと属している。当時インドは 500位の藩国に分れていた。この中で一番大きかったのが，21万30㎢，人口 400万人のカシミールであった。400万人のうち90％が回教徒であり，これはインド全体からみた11％にくらべて圧到的に多い。

ドーグラデ王家のマハラジャであったカラン・シンもヒンズー教徒であったため，カシミールは一時完全独立を主張したが，結局はインドとパキスタンの所属となった。しかし，この分離は民意を無視していた。そしてインドとパキスタンがこの不満に介入したので，インド・パキスタンの終りを知らない戦が始まったのである。

国連も調停に乗り出し，住民投票によってカシミールがインドになるかパキスタンになるか決定するように勧告したが，インドは，カシミールはインド州の一つだからその必要はないと主張し，そのままになっている。

1953年８月９日，当時のカシミール首相，シェイク・アブドラーはインド防衛条令にそむいたということで逮捕され投獄された。カシミールの独立を計画したからである。しかし，住民はこれに強く抗議した。

10年間ほど獄中生活を送ったが，数年前，出獄し，今でもカシミールで活動している。“カシミールの獅子”といわれる彼がどう動くかはインド政府も注目しているところである。

中国との争い

ラダックはカラコルム峠（5575m）のあるカラコルム山脈からコンロン山脈にのびており，コンロン山脈のところから南にむかい，パンゴン湖およびスパルグ湖の東端と接し，ヒマチャル・プラディシュ州に続いている。北東につき出しているチベット高原の西部はアクサイチン地区と呼ばれている。古くはコンロンまたはリンヂ・タン平原と呼ばれていたところで，一木一草もない不毛の地である。

しかし，ここに中国が1950年に道路を建設しはじめ，1956月３月から1957年10月にかけて新彊のカルガリックからチベットのガルトクに自動車道路を完成した。この道は 170kmにわたってアクサイチン地区を通っているが，ここはインド側の主張するインド領内であるから事は重大となった。

1958年，インドは国境侵犯であるとし，中国に正式に抗議した。インドは巡察隊もくり出したがこれが中国兵に摑まるという事件があったりしてインドと中国の仲は悪くなっていった。

1958年の10月にはインド警察がラダックのチャンチェンモ谷を巡察中に３人が中国の国境警備隊に摑まり，それを連れ戻しに行ったインド軍が中国軍の発砲によって９人殺され，７人が捕虜になってしまった。

この事件はあわや戦争になりそうな出来事であったが，中国は，戦線から20km軍隊をひき下らせるという提案を出し，国境交渉にもち込んだ。しかし，インドは戦線ではなく，インドの主張する国境線まで中国軍がさがることを求めたのでなかなか合意は得られなかった。1960年４月，デリーで周恩来とネールが会談したが結果は同じであった。

ソ連と米国ともインドを側面的に援助し，中国もそれに対抗してゆずらなかった。

1959年（昭和34年）中国はチベットを完全に手中にし，ダライマラはインドへ逃げた。1962年秋には中印の東部国境で争いがあり，インド軍は大敗した。

1965年９月１日チベットは中国の自治区として発足した。モンゴル，ウイグル，シャオ，ホイホ

イについで5番目であった。同じ時期に中国はパキスタンとの国境も確定した。

1965年9月，インドとパキスタンはついに全面戦争に入った。第2次カシミール　争と呼ばれる。そのときはインドは勝ったが，かなり苦戦でもあり，将来にそなえてこの国境地区へ良好な軍用道路を作ることにした。

1966年正月，タシュケントでソ連コスイギン首相の調停で印パ両国は会談を開いた。その結果停戦ラインが生まれ，両国はその線まで軍隊を下げることに合意した。

この調印の直後，当時のシャトリス，インド首相は心臓衰弱のため急死した。

ひよわな平和カシミール

カシミールは現在たしかに平和である。花と湖と山に囲まれたカシミール，そして，原始的ともいえる生活をそのままに続けているラダックの人たち。すべては平和で楽しいように見える。しかし，この地区は前述のように国際的に大変微妙な地区となっている。

古い時代からの戦いと侵入，混乱と平和という入り乱れた時の流れが今も続いているといえよう。

〈第3回HAAJヒマラヤ遠征実行委員会要旨〉　HEC-NO-003 30.JAN. 1976
時：12月12日（金）20時～21時30分　　所：名古屋市中村区地産マンション
出席：増田，神　　オブザーバー：岩水，他2名　　他の委員は委任
① NK，GH両隊報告会の件（神）
当日の責任者　館野，鈴木　　速報の編集　稲田，神（各隊30部無料配布）
（B項を適用する）

② ワハン隊経過報告，都居連，推せん状申請した。（神）

〈第4回HAAJヒマラヤ遠征実行委員会要旨〉　HEC-NO-004 4. MAR. 1976
時：1976年2月27日20時30分～21時15分　　所：東京都港区郵便貯金会館
出席：西郡，清水，近藤，稲田，神，植竹，小島，松田　委任(山倉，増田)　オブザーバー
（岩水）

①ワハン隊経過報告（松田）
イ）1975年末に都居連に推せん状交付申請をした。1976年2月25日都居連推せん決定。ただちに日山協へ都居連より申請した。
ロ）計画書詳細ができている。(計画書配布)
ハ）4月初旬にミーティングをもち細部を決定。
ニ）5月の連休に強化合宿をおこなう。

② 1975年HAAJインドヒマラヤ遠征会計報告（稲田）
下記の通り報告があり，若干の質疑ののち承認。なお，今後の支出については各隊ごとで処理する。

〈収入の部〉

項目	金額（円）	備考
隊員通常負担金	10,626,000	759,000×14
隊員特別負担金	420,000	30,000×14
HAAJ助成金	200,000	各隊10万円×2
EXP研助成金	118,000	
EXP研負担金	22,160	
寄付金	30,000	八ヶ岳山協より
装備売却金	1,216,260	札幌 393,910
雑収入	113,129	八ヶ岳 822,350
合計	13,345,549	

〈国内費〉

項目	金額（円）
事務	222,711
渉外	535,956
装備	2,168,296
食糧	564,503
輸送	500,528
梱包	50,560
保険	627,379
医療	6,950
合計	4,676,883

〈国外費〉

項目	金額（円）
NK隊	2,550,000
GH隊	2,492,666
合計	5,042,666

航空費（円払）　3,026,000円
総合計　13,345,549円

※国内費は両隊合成，海外は別海外。

③ ヒマラヤ遠征報告書発行の件（神）
「HAAJ出版物」のA(a)項（遠征隊が中心になって発行）により下記のように発行する予定。予定日までに発行できない場合はヒマラヤ委員会でよく協議の上A(b)項（HAAJが中心になって発行）に移行する。

隊名	発行予定日	編集責任者
1974年ラムジュン隊	1976年8月末	山倉　洋一
1975年　ヌン隊	1976年10月末	山森　欣一
1975年　ガルワル隊	1976年12月末	清水　澄

（なお，カンジロバ隊は，A(b)項で出版。編集責任者　神允人　1976年8月末までに出版する予定）

内容など一切を編集責任者にまかせるが，これまでのHAAJ出版物を参考にして，体裁など，そろえてもらうことが望ましい。第1回校正の段階で，対外的なことともあるので，一度ヒマラヤ委員会に見せて欲しい。この段階でHAAJの購入部数を決定する。

④ 1975年インドヒマラヤ隊の帰国報告書の発行および報告会が無事終了した。従って，これらの隊関係者としての委員であった西郡，稲田，山倉，清水，小島は解任。ただし，稲田は前年度隊，山倉はEXP研代表となって再任となる。事務局はワハン隊留守事務局であるHAAJ名古屋事務所となる。

⑤ 次回ヒマラヤ委員会は1976年4月4日　12時～13時（総会の前）　於：東京事務所

HAAJ 1976 ヒマラヤ・ツアー

お問合せお申し込みは下記へ ― 打合せは毎月第1,第4金曜日の東京定例集会(於：HAAJ東京事務所)などヒマラヤ集会で。

主催 ㈱トラベル日本(一般登録67号)〒100東京都千代田区有楽町2-2-1ラクチョウビル5F(電)03-574-0241(係 外池)
企画・後援 HAAJ・フロンティア〒164東京都中野区中央3丁目48-15沢本ビル1F

出発日	地域・ツアー名	期間(日)	費用(千円)	〆切日	定員	略名
7月25日	小チベット・ラダック	28	386	5月末	20	TIBET
〃	ザスカール	28	356	5月末	20	ZASKAR
8月8日	カシミールの旅	14	389	6月末	20	KASHMIR
〃	アフガニスタン	14	398	6月末	20	AFGAN
〃	ファミリーツアー，カシミールの旅	※14	353	6月末	40	SRINAGAR
12月26日	ネパールの旅	14	275	9月末	20	DURGA
〃	ガイドつきネパールの旅	14	357	9月末	20	KUND
〃	ファミリーツアー，ネパールの旅	※14	333	9月末	40	NEPAL
〃	ファミリーツアー，ガルワルの旅	※14	333	9月末	40	RANI
〃	ネパール・トレッキング	28	275	9月末	20	MODI
〃	山里先生とネパール・トレッキング	※28	478	5月末	20	PICTURE
〃	アッサム・シッキム調査隊	※28	約400	5月末	20	ASSAM
〃	ビルマとダージリン	14	363	9月末	20	PAGODA

上記の日程や費用は51年1月1日を基準としており，航空料，現地の都合で予告なく変更することがあります。詳しい日程表などがありますのでご請求下さい。（※印はHAAJ会員のみ参加可）

ダウラ・ヒマールの旅

74.12～75.1　清野　孝

昨年12月私達５名は長い間あこがれてきたヒマラヤへの旅をついに実行する機会を得て約１カ月に亘るダウラヒマールへの踏査を終えた。

今手元の報告書を見ながら私達の足跡をふりかえって見たいと思う。私達は他のHAAJのメンバーと共に，12月末にネパールに渡った。だれでもがそうであった様に，私達５名にとっても生まれて初めて体験する異国への密かなる期待と不安は，今でも忘れる事が出来ない。

12月24日“白い神々”を機外へ望みながら小さな国際空港カトマンズに着いたのは，現地時間で午后２時15分であった様に記憶している。ランジャン氏や，同郷の後輩に出むかえられ，何の不安もなく，予測していた程物怖じしない大胆さには驚くばかりであった。

私達はカトマンズからジョムソンへ飛んで一路ポカラまで下るコースであったのでカトマンズへ着いてからの忙しさはなかった。皆んながそうであった様に，別送品の受取り，買物，日本への連絡，それにフライトの打合せと５人で駒ネズミの様に動かなくてはならず，市内見学などはとうていおよぶものではなかった。

12月26日，P・P機はどうにか，ランジャン氏の手配で合計３便に渡ってジョムソンまで空輸してくれる事になった。ジョムソンまでの１時間半のフライトは，体験したものだけがわかる感激のフライトとなり，陽気なパイロットは，足で操縦かんをあやつり写真取りに熱中し，私達は心ゆくまで山岳フライトを楽しんだ。

やがてP・P機は本当に降りられるのかと思う様な河原のエアーポートへ砂ぼこりを上げ激しい振動と共に無事着陸してくれた。ジョムソンはすでに2800mを越える高地なので肌寒いぐらいである。明日来る連中を待つ間，２日間ジョムソンに滞在する予定とする。カトマンズと違い緑の少ないこの地は何もかもサバサバしている。まだ若いサーダーと村の中を散策して時間をつぶす。私達の泊るホテルと名のついた建物には，まだ若い主人がいたのでさっそく槍ケ岳のバッチをプレゼントする。

12月28日昨日の午前中に隊員全員と全荷物が無事届き今日はツクチェまで歩く予定。２日前から下痢で寝こんでいた隊員に，このホテルから缶詰を買って食わす。何と1954年製造とか，いやはやビックリする事ばかり。午前中余り良く歩けない様子なのでチベッタンの行商人からロバを借りて乗せる。かわいそうな気がするロバだが，乗ってるロバは牧場でならしたロバだけに余り気にしない様子。それで何とか出発する。午前中きまった時間になるとカリガンダキ下流から吹き上げてくる風と砂ボコリに，サングラスと覆面と言う余りカッコ良くないスタイルには，ガッカリする。

ツクチェには午后３時頃到着，夕食まで村の中を散策し紅茶とロキシーを腹一杯飲んで就寝。ロバに乗った隊員は４回も落ロバしたとか。ツクチェではめずらしいものを買う。

12月29日予定ではツクチェから，ダンブッシュパスに登る予定なのでタパューラぞいに登る。朝日を受けたニルギル，ダウラギリのメインピーク，目に痛い程輝いている。1200mも切れ落ちている壁，こんな所に登路は有るだろうかと思う程。今日はこれを越して泊りとなる。高度3800mすでに陽のささない所では小川が凍り始めていた。

12月30日今日も少々痛い頭をガマンして登り始める。朝日の中のニルギリ，テリィッツオ，を何度もカメラに納めた。一路4050mまで登る。何となくけだるく腰をおろす回数がふえ始めた。

12月31日，日本では大みそか。ここまで来て高度障害にやられたらしく，全員元気がない。初めからフライトの関係で日数が不足していたので，ダンブッシュパスまで登らず，この上4500mまでキャンプを延ばしここから近くの山へ登る事で行動する。夜はきまって，ものすごい風とツクチェピークの北面からの雪崩の音と頭痛に目をさます。

1月2日マルパークから発生している支稜線上の5300mの山へ登り下山する。昨夜はシェルパ達の寝ているテントがとばされ，余り良く寝むれなかったとサーダーはぼやいていた。それにしても，すごい風であった。午后ツクチェへ向け出発する。4050mで一泊，日本から持ち込んだアルコールを飲む。何とまずいことか，コップ一杯飲んだだけでフラフラになる。チャンの方がまだまだおいしかった。

1月4日今日はコパンまで下るので少々早く出発する。途中P.P機が2回ジョムソンへ飛んだ。何んでもヨーロッパ人を乗せて行ったとか。午后を少しまわった所でコパンに着く。今日は少し顔がむくんでいるけど頭痛もしないのでグッスリ休む。

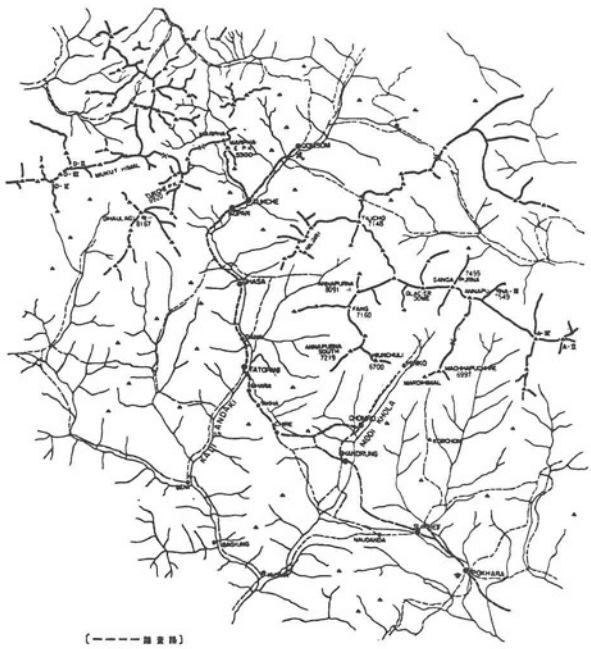
1月5日キッチンボーイの出してくれた紅茶で目をさます。日の当らない所は冷々としていて寒い。そんな中で飲む紅茶は大変うまい。遅い出発である。広いカリガンダキをサリガランを求めて歩く。レテから少し下った所で私達より1週間遅れて出発したHAAJのメンバーと会う。何となくなつかしかった。カロパニあたりからサバサバした風景と違い，緑も多くなって来たせいか何となく潤いを感ずる。ガンサー泊り。

1月6日日本から持って来た鉛筆をカブレの小学校にプレゼントする。記念写真を取ったり楽しい一時を過ごす。鉛筆は良かったけれど紙が少なく，余り役に立たなかったかもしれないと後悔する。タトパニには午后5時到着。小高い丘にテントを張り日本のウドンに舌づつみを打つ。今夜はシェルパ達は外出するとか言って来た。きけばバクチを打ったり，何か色々な事が出来る所があるそうだけど余り遅くならない様注意し許可する。月には大きな丸い輪がかかっていた。

1月7日予定ではゴラパニを越える予定だが途中からモディーコーラへぬける道があるとサーダーが話してくれたのでさっそく出発する。昨夜心配した天気もカラリと晴れ上がり，急坂にうんざりする程汗をかく。半月も風呂に入らないけど，別に気にならない。今日は余り人と会わないので自然と足が早くなる。ガーサ，シーカを越えチャタレーに1泊する。夕方空全体が雲の中につつまれた。ポーター達がだいぶ遅れているので近くの民家でロキシーをごちそうになる。途中のニルギ

踏 査 概 念 図

(ダウラヒマール概念図)



(－－－－踏査路)

リの南面が印象的であった。

1月8日余りの寒さに目をさますと昨夜の雲が飛び去り，白く薄化粧したまわりの山々の美しさにさっそくシャッターを切る。3200mのデオラリパスを越える頃は又小雪がパラついて来た。途中のカルカに1泊しキムロンコーラを越えチャムロンには午后3時頃到着。途中，マチャプチャレ，アンナプルナサウス，ヒウンチュリーが，しゃくなげ林の切れ間から美しい姿を見せてくれた。

チャムロンに着く頃再び空には雲が広がり雨が今にも降りそうだった。昨夜一晩降っていた雨の為，テントもシュラフも濡れてしまう。

昼食をもってヒンコーの近くまで行ってもどる。夕方再び雨に降られグショ濡れとなる。夜はシェルパ達とバクチを楽しむ。実に簡単なバクチで楽しかった。

1月11日雨の為身体になじむ湿気となり，ホコリも立たない石段を登り始める。昨夜着いた八王子の隊はすでに出発して行った。再びキムロンコーラを渡り，キムロンホテルで長野の清水さんの写真を見つける。ガンガプルナ遠征の時のものとか。きれいに整備された石畳をノンビリと歩く，実にいい気持である。午后4時ガムチェ着。

1月12日今日はノーダラまで行く予定。日数もだいぶ減って来た。それに食料も少なくなった。現地で調達したものは何んでも口に入る様になったし現地人と同じ様な事まで平気で出来るまで風俗順化には成功したらしい。ノーダラの丘のキャンプ地に着く頃は薄暗くなり途中で余り油を売り過ぎた気分だった。テントサイトではすでに夕食の準備が出来ていた。ここからのアンナプルナは最高と聞いていたので明朝を期待して就寝。

1月13日夜明けのアンナプルナ，ガネッシュ山群をカメラに納める。マチャプチャレに朝日の当る様子は表現出来ない程美しかった。遅い朝食を済ませポカラ迄歩く。広い河原の中で1人の友人と出会う。年の頃12才ぐらいの少年で半日歩く。お茶や日本のおもちゃをプレゼントする。彼はポカラの母さんに会いに行くとか。

途中のチベッタンのジュータン工場を見学しポカラ入りをする。車の往来にしばしとまどいながらアンナプルナホテルの中庭にキャンプする。明日はポカラ見学をとりやめ1日早くカトマンズへ帰る事にする。今迄いっしょだったポーター達とはここでお別れとなる。隊員の品物を集め彼らにプレゼントする。大変な喜び様で彼らはそれぞれ家族の待つ家へ帰って行った。ホームシッタか，淋しさかわからないが，夜はやけに飲み過ぎた感じだった。

1月14日ポカラ8時20分予定より20分遅れでバスは出発した。私達はネパールで色々な乗り物を利用したがバス程おもしろいものはなかった。屋根に荷物を満載したり，乗客が口論するとそれが終るまでまっていたり，昼食の時間があったり，一時間も前に出発したバスを追い越したりまったく，愉快である。

夕方小雨のパラつくカトマンズのバスターミナルへ着いた。GHEへむかい2日間カトマンズに滞在し色々な所を見たり聞いたり，体験したり，楽しかった旅はもう終りを告げ様としていた。出発の朝首に白いレイをかけてもらい，何度も別れをおしみ，記念写真を取り機内の人となる。DC8型機はゆっくりと滑り出した。

窓に顔を押しつけ最後の別れをする。サーダーの今にも泣き出しそうな顔は今でも忘れる事が出来ない。

この感激は一生忘れるものではないだろう。

聞けばカンバ族のイザコザでジョムソンへは簡単に入れないとの事，本当にいい時旅をしたものだと思っている。

今私の住む所は梅雨の真っ盛り，時折り見える青空に遠いネパールを思い出し，今度は西の方へ行って見ようなどと思いをはせながら近い内再びあの青空の元へ，そしてあの陽気な連中の待っている所へ旅立てる事を思いつつペンを置こう。

〜〜〜 北海道ヒマラヤ集会 〜〜〜 予告 〜

毎月第1月曜日　18時頃から

札幌市北1西4棟向　喫茶「ねむの木」3F

特別室（お茶代・実費）

寄数月はテーマのある定例集会。偶数月は自由な集会。ヒマラヤ行の相談，雑談，山行の打合せなどに利用して下さい。デートにもどうぞ。

問合せ先　大崎正信

または　　阿部　淳

——Expedition研究グループ——

体質改善，遠征の方向などを決定

事務局　〒960福島市八江町

ラムジュン，カシミール，ガルワールの三遠征の中核として動いたEXP研では，このほど年次総会を開きました。会議では75年隊の総括，財政，組織運営，方向，活動計画等多方面にわたり検討されましたが，ここには主として今後の方向について合意を見た点をお知らせします。

1.　今後のあり方

(1) EXP研は，今後Expeditionの「実践体」であることを基盤とする。

EXP研は，EXP研自体を土台としてExpeditionを行なおうとする者の集団である。

したがって，他組織でもってExpeditionを行うための情報収集や，研修の場ではなく，また，Expedition の実践を抜きにした単なる研究の場でもない。いわんや社交(サロン)の場として存在するものではない。

このような目的，期待をもってこのグループに入ることや，Expedition 実現の意欲なくして在籍することは認められない。

(2) EXP研の実践は，確固とした「研究」の上に立ってのみ築かれるべきである。

ラムジュンでスタートした3回のExpeditionを省りみて，種々の事情があるとはいえ，実践が先行し，研究が後を追う傾向になってきたことは好ましい事ではない。

実践に結合する研究が確立され，研究の成果を充分に生かした企画によって行われる，Expedition がベストである。

EXP研は隊ができあがり，実践に移るまでの主要な研究をなし，推進母体としての役割りを果すことに重要なポイントを置くこととなる。

今後「研究」のあり方と進め方を充分に検討する必要がある。

(3) EXP研自体が行うExpedition は，実践段階で隊が中心となるとしても，その実践の基本的コントロールはEXP研の意思によってなされるものである。

EXP研がコントロールをし，計画を進める以上，隊に対するEXP研としての権限と責任に関し，その所在と限界を明確にしておくべきである。

隊成立後，その実務は隊に移行する。隊はこの実務と実践の枠内においての裁量権とこれに附随する責任を有するものである。

(4) EXP研は，遠征隊にかかる経費について無限の責任を有することをしない。

EXP研は，遠征隊に関する経費（準備段階から帰国後の事後処理にかかる資金面）について，運命共同体としての責任をもつものではない。

いわゆる遠征隊を派遣するための収益事業は，EXP研自体としては行わない。しかし，隊が必要とし，その要請があれば協力して行うが，損益ともに隊に帰するものとする。

会員は「義務」でなく「協力」の精神でもって参加する。

(5) EXP研は，HAAJの組織の中において，HAAJとともに発展するものでなければならない。

EXP研がHAAJの内部組織でありHAAJの将来にかかわりExpedition に関する分野の中核を実質的に果してきたことを考えれば，その活動はHAAJの動向を無視して行うことはできない。

EXP研の活動がHAAJの方針，規約，申し合せ等による一定の制約を受けることは当然であり，EXP研の発展はHAAJとの相関関係によって左右されるともいいうる。

このため，HAAJ自体の進展に関しても積極的に参加し，HAAJの組織の強化をうながし，体制の確立に寄与するような確固たる活動と方向づけをもってゆかなければならない。

2.　当面の方策と活動

(1) 実践体にふさわしい強固な組織基盤を樹立する。

将来にわたって継続的に実践を行うに必要な若いメンバーが必要である。

現メンバーの努力により積極的に発掘し，たしかなベースを確保したい。

(2) 財政の確立

負債の早期完全解消。

(3) メンバー相互のコミュニケーションの強化。

お互いがよく理解し，同志としての信頼と連帯を促進する。

(4) 74～75年遠征を確実に総括する年次研究を行う。

三つの Expedition を厳しく総括して次の活動に結合させる。

総括にあたっては，全メンバーの積極的参加を組織する。

(5) 当面の活動の方向として，近い将来，74～75年遠征の総括の上に立った Expedition および次の段階として文字通りの〝総力戦〟を実施する。

詳しくは74年次研究会においてまとめられた方向で推進する。ただし，実施年度，目標は柔軟性をもって考える。（別記「EXP ニュースNo.24　74年次研究報告」参照）

3. 海外登山に関する指摘事項

今回の遠征に関連し，次のような点が指摘された。

○ 隊員公募の意義は何処にあるのか。

○ 隊員選定は何の基準により，誰れによって決定されるのか。

○ 登山計画の内容と，それに対する人選の内容との相違。

○ 登山隊を推進させる母体確立の不備。

○ 隊のコントロールの権限の範囲とそれに対する責任所在が不明確。

これらについて，それぞれの回答や意見が出されたが，EXP研の今後の活動の基盤ともなるべき内容を持っているため，改めて討議することとした。

登山中における隊員の活動意欲のあり方，高所活動における基本的技術の欠除，装備，食料の管理運営のあり方，その他，意外と基礎的な事項に関する問題が提起され，現実的な面での今後の検討が改めて痛感された。なお，75年隊の技術的検討は，ラムジュンも含めて後日，年次研を開いて改めて検討することにしている。

AFGHANISTAN ～～ 旅行メモ

〈ヴィザ〉 1週間の Transit Visa，1カ月の Tourist Via などが在日アフガニスタン大使館でとれる。代理申請可，写真3，パスポート，約1500円〒150 東京都渋谷区神宮前6—31—21，オリンピア・アネックス503号（電）03－407－7900

〈お　金〉 1US$≒45Afghanis　1Af.＝100 Pools≒7円 両替レートは流動的，銀行でも国立銀行（Da Afahanistan）と私立銀行（Bank-j-Melli など）では同一の日でも異なることがある。闇レートは1US$≒55～65Af.

〈予防接種〉 天然痘，コレラ必要，腸チフス，急性肝炎も接種した方がよい。

〈国　勢〉 1973年7月に革命がおき，立憲君主制から共和国になった。

人口1700万人　面積65万㎢（日本の約1.7倍）　国民は平均1カ月 180円（1973）で生活している。首都カブール。

〈食　事〉 Palaw—羊肉などを入れたまぜごはん。

Kabab－羊肉の串焼

Ashak—サラダのようなもの（ヨーグルトねぎなど入っている）

お茶—チャイハナで紅茶のような茶がのめる。

酒 —入手は不可能に近い。

〈バ　ス〉 Afghan Post Bus。カブール河岸，郵便局近くから出る。Qaderi Bus などはカブール河両岸のバザール近くで発車。

〈レストラン〉 最高級，Bagh-i Bala：Amir Abdur Rahman（19世紀の本)の夏の宮殿であった。丘の中腹にあり不便

高級，Khyber Restraunt

中級，Metropol，Malcoporo

〈大使館〉 240～241 Wajir Alcbar Khan Maina Tel 26844(電話事情はよい)

・・・・・ ザスカールへの夢(続) ・・・・・

沖　　允人

ヌン・クン山群

ヌン・クン山群の北面，南面の各コースについては「ヒマラヤ」44号の「ザスカールへの夢」で触れたが，カルギル――スル――ハンペットのコースはHAAJの池田昭二氏の隊が1975年8月にトレースした。スル――パルカチ――ランドンゴンパ――ピズドン・ラ（4810m）はHAAJザスカール踏査隊の石川真智子氏らが同じく1975年8月にトレースしその概要は「ヒマラヤ」50号に報告されている。

残されたところとしては，スルを起点として，その西のP.5980からゾジ・ラ（3530m）の山群である。ゾジ・ラまでバスで行ってそこから南に入るルートもある。いずれも氷河があり，岩山もありで楽しめよう。

アマルナートの洞穴から東へむかうコースもある。アマルナートまではバスの終点パハルガムから3日～4日で巡礼道を通って達せられる。2日目位までは馬で行くこともできる。途中には村が点々とあってレストハウスもあり，宿泊や食事には困らない。ただし，10月～5月までは奥の方の村は人が住まなくなる。アマルナートへあと1日というところに大きいパンチタルニーという平原があり，そこから東へ入ってラダックに行ける。このあたり山また山といった感じである。右手にP.4918，左手（北）にはP. 4480，P.4941があり，さらに東へ進んでP.5980の南にあるタパハー（Tapahah）に出ることができよう。ただ，P.5356の近くの峠をこえなければならず，ここがポイントになりそうである。アマルナート洞穴のあたりのことは名城大学第5次ヒマラヤ調査隊帰国報告書「カシミールからラダックへ」に発表してある。タパハーからは北へむかってP.5980とP.5282のコルをこえサウカ（Sauka）に出るか，南西の方向に川沿いに下ってスルの一つ下の村，ナショップに出る。いずれも踏跡がありそうである。ITBPの山岳班の連中が，このあたりは広く歩いたり，登ったりしている。「ITBPレポート」が発行されているが，軍用のものなので入手はおろか，目にする機会も少ない。サウカからウンバ・ラ（UMBA・LA）を越えてダラスに出ることもできる。もう少し北にもラサール・ラ(LASAR・LA)があって，ときどき人が通っているようである。これらの峠に登ればインナーラインの北，バルティスタンの山々を眺めることができよう。このあたりの地図は「秘境小チベット・ラダック」の附図が便利。ただし，誤りも多い。

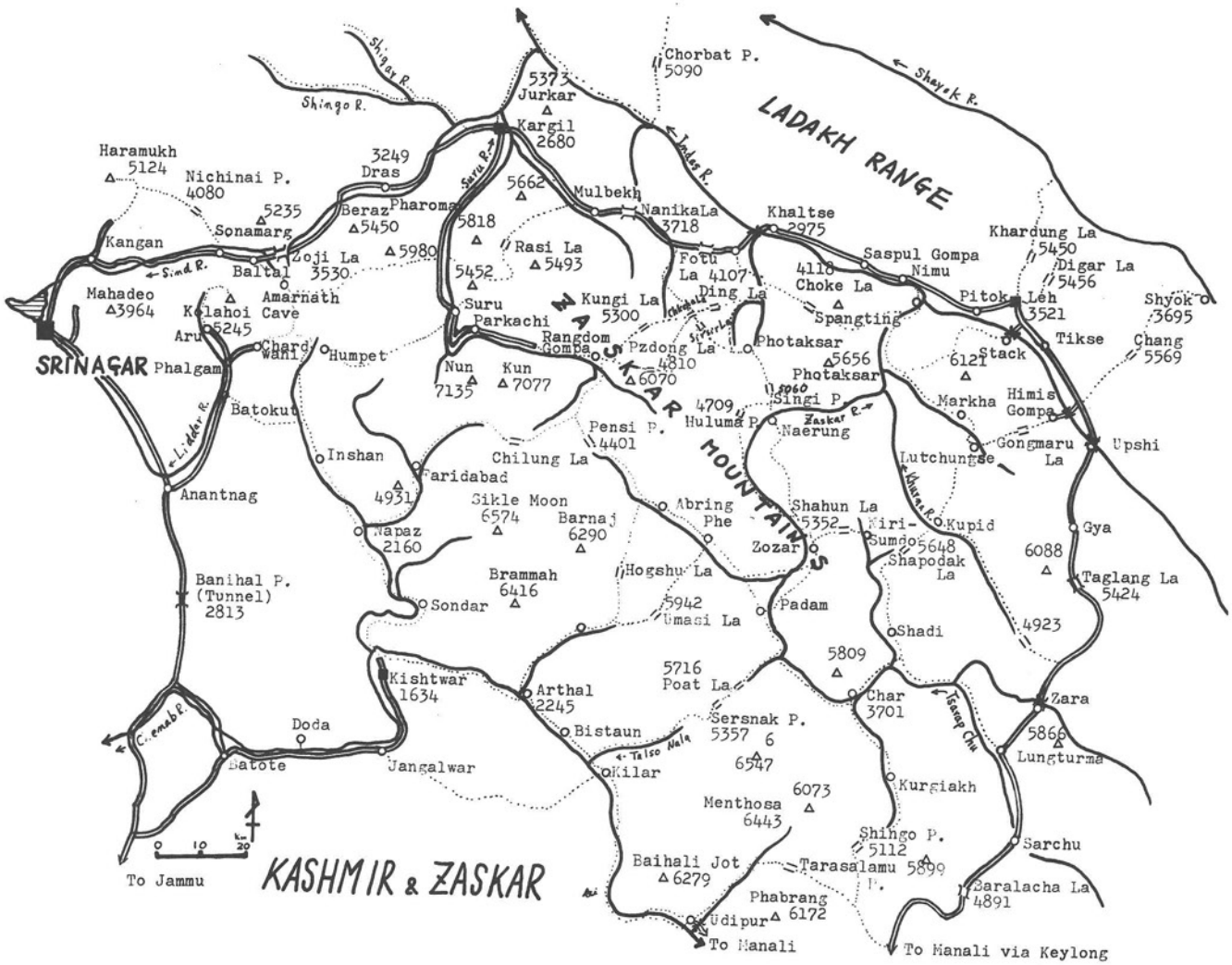
ヌン・クンの東

ヌン・クンの東へ足をのばして リンドン・ゴンパからクンギ・ラ(Kungi La）5000mを経て，フォト・ラ（4094m）の西に出るコース，シルシル・ラ（Sirsir La 4989m）を経てフォトクサール（Photo Ksar）へ出，ラマユルの村へ出るというコースもある。フォトクサールという山（5656m）もこの村の東方にある。ビズドン・ラ（Pizdong La）から5日ほどでChakcha La，Dbing La，Linset Laを通ってラマユルへ出られるコースがあり，地元の人はよく通っている。しかし，地図ではトレースできない。多分，Chulungの川から，Shillakongの川へ峠を越えて出，それを下ってプリンキ・ラ（Prinki La）を越え，ラマユルに出るコースであろう。

ザスカール核心部へ

フォトクサールからシンギ・パス（5060m又は5669m）を越えるとザスカール川に着く。そこからナエルン（3599)を経てゾザール(Zozar又はZuzzar）に出る。またはクバ・ラ（Kuba・La）ニイエツケ・ラ，チュプクン・ラ，フルマーラ（Hulma・La 4910m）を経てOma Chuの川に出，もう一つプルリ・ラ（Purli・La 5163m)を越えてザスカール川に出，これを登ってゾザールに出ることもできる。苦しいがこの方が興味深い。

ゾザールの南，ウマシ・ラ(Umasi La，5942又は5330m），ムニ・ラ(Muni La），ポアト・ラ（Poat La 5716m又は5715m），その南のセンサ


KASHMIR & ZASKAR
LADAKH RANGE
ZASKAR MOUNTAINS
SRINAGAR
Haramukh 5124
Nichinai P. 4080
Kangan
Sonamarg
Baltal
Zoji La 3530
Mahadeo 3964
Amarnath
Kolahoi Cave 5245
Aru
Chardwani
Humpet
Phalgam
Batokut
Anantnag
Banihal P. (Tunnel) 2813
Doda
Batote
Jangalwar
Kishtwar 1634
Sondar
Napaz 2160
Inshan
Taridabad
4931
Dras
3249
Beraz 5450
Pharoma
5980
Shingo R.
Shigar R.
Suru R.
Jurkar 5373
Kargil 2680
5662
5818
Rasi La 5493
5452
Suru
Parkachi
Nun 7135
Kun 7077
Rangdom Gompa
Mulbekh
Chorbat P. 5090
Indus R.
Shayok R.
NanikaLa 3718
Khaltse 2975
Fotu La 4107
Ding La
Kungi La 5300
Pzdong La 4810
6070
Photaksar 5656
Photaksar
4118
Choke La
Spangting
Saspul Gompa
Nimu
Pitok
Leh 3521
Khardung La 5450
Digar La 5456
Shyok 3695
Tikse
Chang 5569
Stack
6121
Markha
Himis Gompa
Gongmaru La
Upshi
Lutchungse
Kupid
Gya
6088
Taglang La 5424
4923
Zara
5866
Lungturma
Sarchu
Baralacha La 4891
To Manali via Keylong
Pensi P. 4401
Chilung La
4709
Huluma P.
Singi P.
Naerung
Zaskar R.
Sikle Moon 6574
Barnaj 6290
Abring Phe
Shahun La 5352
Zozar
Kiri-Sumdo 5648
Shapodak La
Brammah 6416
Hogshu La
5942
Umasi La
Padam
Shadi
5809
5716
Poat La
Arthal 2245
Bistaun
Sersnak P. 5357
6547
Char 3701
Kilar
Menthosa 6443
6073
Kurgiakh
Shingo P. 5112
Baihali Jot 6279
Tarasalamu P. 5899
Phabrang 6172
Udipur
To Manali
To Jammu
Chenab R.
Indus R.
Zanskar Chu
Tsarap Chu
Tsarap R.
Lidder R.
Sind R.
Tsarap
Tsarap Lg
Tsarap Lg
Tsarap Lg

ンク・パス（Sarsank P. 5375m）あたり，地図では村が沢山あるが，はたしてそうであろうか。この地域の南はメントーサ(Menthosa 6443m)，バイハリジョット(Baihali Jot 6279m)などラホール・スピティの山になっている。そして，さらに南へ出ればシンゴー・ラ(Shingo La 5112m)からラムジャク・ナラを下り，バルシー・ナラの谷へ出て，ケイロン手前のバス終点，スムドへ出られる。

タルサラム・パス(Tarasalamu)からはミャール・ナラ(Miyar Nala)へ出，チャラン(Charang)ウルガス(Urgus)の村を経てウダイプールへ出られる。ウダイプールはロータン峠を経てマナリへ行くバスの出発点である。

ポアト・ラからはテンサンク・パスを越え，タルソ・ナラ(Talso Nala)へ下り，キシトワールのキラールの街に出られる。

ザスカール川を下って行くとニンム(Ninmu)の村に出てインダス川に合流する。ゾザールからシィァフン・ラ(Shiahun La 5352m)を越えて，ニリ・スムドに出，その東の高い峠(Shapodak・La 5648m)を越えてラプルバから再び北のルベング・ラを経てマルカ(Markha)の村からニンムに出るのである。マルカの西に温泉が出ているようである。

マルカーから川を登り，ルトチュンセ(Lutchungse)の村からゴンマル・ラ(Gongmaru La)を東に越えると有名な赤帽派のラマ寺ヘミス・ゴンパの裏山に出る。ヘミス・ゴンパからは車道があり，インダス川の橋を渡れば，レーまで約35km，バスが走っている。

レーからスタックの村にも車で行くことができる。ここにも古い王宮があるが，この村を通り，その裏山に登ることができる。スタック山群と呼ばれており，5000m級のいい形の山が5～6座ある。この山群へはレーから少し西へ車で行ったピトックから南に入り，ルンバック(Rumbak)の村からまわり込むこともできる。P.6121などがあるが，ITBPのパーティなどが登っているようである。

前記のニリ・スムドからニリチュの川を下り，シャディ(Shadi)に出，チャール(3701m)からシンゴー・パスに出るコースもある。また，チャールの北東のもう一つのスムドウの村からツァパップ・チュをたどり，ルングトルマ(Lungturma)に出てレー――マナリーの車道に達することもできる。しかし，ここからマナリに出るのにはバララチャ・ラ（4891m）を越え，しかもインナー・ラインに接しているので微妙である。むしろ，ひきかえしてタグ・ラング・ラ（5424m）に出，ガヤのゴンパまで車道を歩き，ここからヘミスの裏山に出るか，スタックに帰る方が，無難であろう。ただし，かなりの日数がかかる。

コースを決めるにあたってのアドバイス

私の経験からいうと，未知のコースがほとんどの場合，周遊コースを計画すると不確定要素が多いので，心理的に最後まで不安であるし，事故がおきると大変めんどうになる。往復コースまたはある地点まで行ってベース地を定め，そこから放射状に足をのばす方が，行動範囲を広くとれる。不便な地方だから，帰路のことをくれぐれも考えておくことであろう。バスをあてにしていても，土砂崩れで不通になり何日間も待たされるということにもなる。従って帰りのバスに乗る地点は村も街もないところはさけるべきで，スル，カルギル，ボドカルブ，ムルベック，レー，などにするか，フォト・ラ（ここには軍の連絡所がある。）などにし，何か事故の場合，スリナガールやレーに連絡がとれるところにすべきであろう。ザスカールはネパールのように人は歩いておらず，村の数も少ない。それに高い峠に囲まれているので，降雪があった場合の脱出も困難である。季節は5月以降10月いっぱいまでであろう。11月に入ったら，万一の場合は越冬という覚悟で行くことになろう。レーの街に2カ月も閉じ込められたインド人の話を聞いたことがある。いったん閉じ込められると，春まで待つか，10日も20日も歩くことになる。

以上の紹介したコースはあくまでも地図の上や人に聞いた情報をもとに考えた私の夢であるからこの通り歩けないこともあるかも分らない。日数は不明である。ザスカールは外国人には未知であるがここに住む人はどこへ出るのにも歩いているので，道の情報は村の人に聞くと確実である。そのためにウルドウ語かチベット語，できればカシミールやラダックの言葉を少しでも知っているか，英語の話せるガイドをやとうべきであろう。

登山について

6000mを越す名前のある山へ登るにはIMFの登山許可が必要である。しかし，それ以下の山なら，はっきり駄目という規定はない。ただ，無許可で登ってもよいということもいわれていないので，要は事故をおこさぬように気をつけて登るべきであろう。目的はあくまでも観光のカテゴリーに入るトレッキングまたはハイキングであり，踏査や登山ではないと〝タテマエ〟ははっきりしておくことである。そして，自分の行動によっておこったトラブルは自分の責任であると覚悟しておくことである。

軍用地帯が多いので，カメラ，地図，メモなどの取扱はくれぐれも注意すること。ガンジー首相の選挙違反問題以後，インドの警察の取締は大変厳しくなっている。

ヒマラヤに関する質問と解答

質問1　クル・マナリ周辺の高度な氷壁や岩壁登攀を必要としない6000mの未踏峰を1カ月位で登りたいと思いますがいい山はありませんか。

〈答〉クル・マナリ周辺の6000m峰はほとんど既登峰，特に容易に登れる山は登りつくされています。従って答は「ありません」ということになります。アドバイスとしては既登，未踏にこだわらず面白い自分たちにあった山を選ぶことでしょう。ただし，6000mを越す山でIMFの許可なしに登れる山はディオチバ，インドラサン，ハヌマンティバとその周辺くらいです。マカルベーなども可。

ラホール，スピティ，ラダッタ，カシミール地方なら未踏峰で5000～6000mの山は沢山あります。6000mをこした名前のある山へはIMFの許可が必要と考えた方がよいと思います。IMFの許可は6カ月以上かかります。

質問2　インドへ行く安い航空機などあったら紹介して下さい。

〈答〉割引値段で売っている社がいくつかあります。ただし，いろいろ条件があります。それに，それらの値段は〝モグリ〟の値段ですから公表できません。HAAJ東京事務所の鈴木康志（ツアー担当）に直接聞いて下さい（電話または面談，手紙では答えられません。）

質問3　ヒマラヤ各地の連絡所などをおしえて下さい。紹介カードで友人も利用できますか。

〈答〉会則に付記してあります。ただし，デリーは休止中です。デポ装備はHAAJのパーティのみに貸出すことにしました。個人には貸出していません。紹介カードの利用者はもちろん会員にかぎります。

質問4　インドで購入可能な登山装備は何がありますか。

〈答〉「ヒマラヤ」47号P.15のリストを見て下さい。ただし，登山用具は売っているところがみつかりにくいので，それに関しては「ヒマラヤ」40号P.31「ヒマラヤ」41号P.5の体験的デリー案内をお読み下さい。

質問5　ネパール，パキスタンのビザは現地で取得できますか。

〈答〉パキスタンは3カ月までビザ不要です。それ以上はインドではとれませんので日本でとって行くかアフガニスタンでとるかです。ネパールはインドで（ニューデリー又はカルカッタ）とれます。しかし，申請するために場所が分らなかったり休みも多いので日本でとって行く方が便利です。発行後3カ月以内に入国すれば可。代理申請もできます（手数料3000円）（印税2000円位）

HAAJ東京事務所鈴木康志（ツアー係）へ。

質問6　インド，ネパールの事情についておしえて下さい。

〈答〉とりあえず「ネパールへの旅」600円，「インド，ヒマラヤ，トレッキング」100円を読んで下さい。そして，なお不明の点はHAAJヒマラヤ集会に出席して直接，経験者に聞いて下さい。地方からだと交通費がもったいないと思われるかも知れませんがそれだけの〝トク〟は必ずあります。

新　刊・旧　刊

インド酔夢行

田　村　隆　一著

日本交通公社　76年2月1日発行 980円

「コモリン岬に夕陽を追う」から始まる，詩人の目で見たインド。文体が軽妙で読ませる。〝インド・ブーム」なるものが静かに湧き起っているというが，最近相次いで出るインド紀行ものでも判るような気がする。

サハラに死す

時事通信社　昭和50年11月20日発行 780円

〝希望にとっては，無限とも思われる苦悩に耐え，死や夜よりも暗い誤ちをゆるし，絶対とも思われる権力に抵抗し，その志をかえず，よろめかず，悔いることのなきものはよき人であり，偉大な人であり，美しき人であり，自由な人である〟の言葉をいつも離さず，サハラ砂漠の横断に挑み3000kmを一頭のラクダと共に歩み，死んでいった青年（上温湯隆（かみおんゆたかし））の手記。

50数カ国を放浪し，また固い信念のもとにサハラに旅立って行ったドキュメントは重みをもって迫ってくる。ヒマラヤの本ではないが共通するものは多い。なお姉妹編として最初のアフリカの旅の手記「サハラに賭けた青春」も同じ出版社から出されている。

1974年ヒマルチュリ遠征報告

青山学院大ヒマラヤ遠征実行委員会75年5月10日発行　非売品。

東壁からの登頂をねらったが悪天候により，7050mを最高到達として断念した。

日誌的報告書で写真が多い。問合わせは下記へ。

サルトロカンリ7742m

東京北稜山岳会　75年11月20日発行

75年夏の記録。サルトロ・カンリは1962年AACK隊によってP．36永河から南東稜を経て初登頂されている。この隊は南稜からの新登頂をめざしたが6500mで断念した。

型どおりの報告であるが，帰国後わずかの期間で出されたことは評価される。　　下記へ。

第13回海外登山研究会報告書

日本山岳協会　50年11月発行　領価2.000円（送料別）

50年1月12日開催された研究会の報告書。講演（高所順化，ヒマラヤ比較登山編，他）と情報，49年隊の報告，50年隊の計画についてなど。研究会での発言が忠実に収録されている。

HAAJ出版物などの委託販売について

HAAJ出版物を委託販売（山岳会などでまとめて購入していただくものもこれに含む）していただく場合，それが営利を目的としない場合（自分たちの仲間，協会の集会など）は下記の取り決めでお願いします。営利を目的とする場合（本屋さんなど）は別の申し合せによります。

1．1口10部とする。
2．代金は10部分を全額全納とする。ただし，特別の事情があれば話しあって分納もできる。
3．手数料として10部について1部無料進呈する。（10部分の代金に対して11部送る，　約10％となる。ただし，前金の場合は2部無料，約20％引）
4．委託先への送本に要する費用はHAAJで支払う。
5．委託者からの返本などに要する費用は委託者が支払う。

図書券を受けとって売られた場合は図書券を送金に加えて送って（入金として）下さい。

なお，図書券は51年4月30日で廃止する予定です。まだお持ちの方はこの日までに使って下さい。

HAAJ名古屋

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.
EXPRESS HOUSE
NAXAL BHAGABATI BAHAL
P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL
電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE
をご利用ください。
家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もできます。 宿泊代＝1泊朝食付30RSから
※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合せください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

★シルクロード 6,000キロ
★ネパールとアフガニスタン
★砂漠の国アフガニスタンと最後の桃源境フンザ
★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) トラベル日本
〒100 東京都千代田区有楽町2－2－1
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461
担 当——外池(とのいけ)・永瀬・月候・小島

海外登山，トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております
岳(タケ) 産 業にご相談して下さい！

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？（所得補償保険）
●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー（山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット）・普通傷害・利益・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災保険(株)代理店 岳(タケ) 産業
大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06〔304〕1115番
●ルスノトキ＝大正海上十三営業所 304－5774

発行　日本ヒマラヤ山岳協会　昭和五十一年五月一日発行　通巻第五十四号　定価　五〇〇円・送料　一四〇円（年間購読料四〇〇〇円）
発行者　柴田　金之助　名古屋事務所　〒四六八　名古屋市天白区一つ山一－四十四－七　☎〇五二－八〇一－四四一四
編集　「ヒマラヤ」編集委員会　東京事務所　〒一六四　東京都中野区中央三丁目四十五－十八　沢本ビル1F　☎〇三－三六五－二一六二

大自然の神秘と雄々しさ、ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノー・公害
時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花園の美しさ。海抜4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウット湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

ダージリン
ヒマラヤのリゾートタウン「ダージリン」は海抜2134mの高地にあります。インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダージリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガー・ヒルから望むカンチェンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもの。見る人の心に衝激にも近い感動を与えずにはおきません。

シッキム
ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはここのことです。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。
ダージリンからの途中にあるカリンポンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。
〔註〕シッキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要です。詳しくはエア・インディアにお問い合せください。

ガルワル・トレッキング
ガルワル地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビー（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫〝花の谷〟や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。

世界の35都市をネットする——
エア・インディア
東　京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100☎214-7631
大　阪●東区備後町松豊ビル〒541　☎264-1781
名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450☎581-5876
広　島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル〒730　☎28-7211